



金婚式を迎えて二人仲良く 平成 22 年 10 月



世界で一番の笑顔に“ありがとう”



手作りの手鞠

## はじめに — 人生のしあわせは“えがお” —

五十六年間連れ添った伴侶を失った悲しみは何ものにも例えようがない。津波で大切な連れ合いや子供、親をさらわれることなど、その瞬間まで想像していた人はいない筈だ。問われると言葉を失ってしまふのは当然であろう。ショックとかパニックなどという生易しいものではないと思う。悔しさが残る。悔やんでも悔やみきれない。

私は引揚げの時に家、土地、財産まで失ったが、幸い、私は病身の母を背負い暴徒から逃げた。人間は“えがお”を忘れたとき人が変わる。無欲容貌とは欲を捨てさせられた顔だ。本能から生まれる“えがお”のうち、どれが一番美しくみえるだろうか。三大本能のうち、誰もがすぐ気付くのは栄養本能（食欲）。食欲は生まれて初めてお乳を吸う時から死ぬ前まで、『食べるという欲』は最も強く、動物はそのために奪い合うこともしばしばだが、人間もあまり変わらない。美味しい料理や酒には誰でも微笑む。その匂いだけでも“えがお”になる。

個体保存本能（性欲、恋愛）はお互いに精一杯相手をひきつける努力をする。着るもの、化粧、香水、オーデコロン……と必ずつい“えがお”をしてみせる。極楽鳥の雄が羽根を丸く一杯に広げ、雌の周りを飛びまわる様は人間も同じだ。精一杯のおしゃれをしてお見合いをしているのは微笑ましいが、緊張し

て“えがお”を忘れ失敗することはよくあることであろう。

十三・六倍の競争率を勝ち抜いてきた岡山医科大学専門部の学兄諸氏には立派な人物がおられる。開業医として大病院を造り、また地方の名士となり地域医療を支える方、教授や学長も輩出した。私が勤めている社会福祉法人旭川荘の江草安彦先生もその中のお一人で、川崎祐宣先生の遺志を継いで、職員二〇〇〇名、施設入所者数八〇〇余名の日本有数の施設をつくりあげ、政府の委員など現在も活躍中で、私の敬愛する親友である。

私は授業料を払わずに済んだのは幸いだったが、下宿（二食付き）の支払いは、休みをすべてアルバイトしてでも足りず、次の学期は止めようかと思うことも何度かあった。途中学部編入もあったが、一年でも早く医師免許を取りたい一心でアルバイトを続け、図書館の本を抜き書きしてテキストが三冊しかないのを補った。自転車に竹かごをつけて、ゴム草履を農家に売って廻ったのは決して楽しい思い出ではなかった。

若いパワーは疲れ知らずのところがあつて、眠らなくてもそれに順応できることを知った。このあとの研究室時代も一日三〜四時間ぐらいの睡眠だったが、おかげで米国シカゴの病院では四日に一回の当直（シフト）のときも翌日八時からの診療を続けるのに耐えられた。文中にあるように医局で副手といえば恰好よいが、実際は無給の研究生で、梅香の給料で学校を続けさせてもらい、医学博士号を授与され、共に喜びと充実感を味わった。

学生の頃から伸郎君と呼ばれていたが、八十三歳の今も若い学生さんたちや周りの人たちからは、伸郎先生と親しく呼んでもらっている。親に良い名前をつけてもらったと喜んでいる。

私には人に自慢できるものはないが、二つだけある。一つは人生の恩師である二人の内科医であり、共に学長（国立大学）になられた方々と五十六年間のパートナーであった妻（梅香）の“えがお”である。早くに亡くなった母が一度会って「この方をお嫁さんにもらって幸せになつてね」と言い残した姿を（彷彿される優しさが妻（梅香）にはあった。

彼女の母は「伸郎さん、梅香がついていれば大丈夫よ」と後押ししてくれた。亡くなられた夜半にご主人と一緒に私の枕もとに鮮やかなカラー映像で来てくれ、ゆつくり話をした。

辛抱強さ（忍耐力）とその持久力は私の遠く及ばないものがあり、どんな境遇でも“えがお”を忘れなかったことを不思議に思うくらいである。岡山から幼い子を二人連れて東京へ移つても、何にも言わず明るい“えがお”でついて来てくれ、ときには背中を押して新しい仕事に勇気を与えてもらった。

心に強く訴えるのは美辞麗句より“えがお”が勝るとは、ずっと後で気が付くことが多い。帽子をかぶり、“えがお”で待っていた妻 梅香に惚れた私は、どんなときにも必ず“えがお”で迎えてくれたことを本当に嬉しく思い、亡くなった今でも感謝している。世の中にはいろいろな美人がいる。自分の仕事仲間や外国に行ったら何人でも出会う。しかしあの“えがお”をいつも見せて貰えるだろうかと思

うと、この美人より妻を選んだことが遥かに良かったと、幸せを反芻するのが生涯最高の伴侶を得ている喜びだった。

人は誰もが自分や妻を誇りに思い、それを頼りに生きているものである。それを支えるのは妻であり、家族であり、一緒に暮らす幸せを自分のエネルギー、生き甲斐にしている。

東日本大震災という未曾有の災害に“えがお”をとり戻したいと多くの被災者が訴えていることが胸を打ち、涙ぐましい支援の輪が広がっている。一日も早く終息して安らかな生活が戻ってくることで、きつと“えがお”を取り戻せると信じている。

お父さんのたくましい“えがお”。お母さんの美しく優しい“えがお”。赤ちゃんの純粋な“えがお”。幼児たちの無邪気な“えがお”に加えて、若者たちのはち切れるような“えがお”など、集まればとても楽しいし、自然に“えがお”の輪が広がっていくことを願ってやまない。